

# 経済学と聖書(6)

2020年6月12日(金)

関西学院大学経済学部

春学期チャペル

担当：井口 泰

## 讚美歌21 471 We shall overcome

1. We shall overcome  
We shall overcome  
We shall overcome some day  
Chorus:  
Oh deep in my heart  
I do believe  
We shall overcome some day

2. We'll walk hand in hand  
We'll walk hand in hand  
We'll walk hand in hand some day  
Chorus:

3. We shall all be free  
We shall all be free  
We shall all be free some day  
Chorus:

4. We are not afraid  
We are not afraid  
We are not afraid today  
Chorus:

5. We are not alone  
We are not alone  
We are not alone today  
Chorus:

6. The whole wide world around  
The whole wide world around  
The whole wide world around some day  
Chorus:

7. We shall overcome  
We shall overcome  
We shall overcome some day

## 歴代誌 I 21:1~21 「ビッグデータと世界」

「さて、サタンがイスラエルに向かって立ち上がり、イスラエルの人口を数えるように、ダビデをそそのかした。…この命令は神の目に悪しきことであった。神はイスラエルを打たれた。…主は、イスラエルに疫病を下されたので、イスラエルのうち7万人が倒れた。…神は、エルサレムを滅ぼそうと、御使いを遣わされた。主は御使いが滅ぼしているのを見て、わざわいを下すことを思い直し、滅ぼす御使いに言われた。「もう十分だ。手を引け。…ダビデは神に言った。「民を数えよと命じたのは私ではありませんか。罪があるのはこの私です。私が悪を行ったのです。この羊の群れが、一体何をしたというのでしょうか。…「ダビデは上って行って、エブス人オルナンのうち場に、主の祭壇を築かねばならない。」」

今から3000年の昔、ベツレヘムのエッサイという羊飼いの末っ子として生まれたダビデは、イスラエル統一国家の第二代の王となり、エルサレムを占領し首府を築いたことは多くの方がご存じでしょう。詩編にダビデの歌とされる詩が多く残され、神を深く信頼した人として描かれています。同時に、ダビデは自己を過信し、何度も神の怒りを買う罪を犯したことが記されています。

歴代誌(上)(サムエル記上の終わりにほぼ同文の記述があります)、ダビデが、イスラエルの人々(ここでは男性を指します)の人口調査を企てたことが書かれています。インターネットで全てが繋がれ、ビッグデータが急速に普及し、知ってか知らずにか、情報で世界をつないで技術革新を生み出そうとしている現代からみると、神様がダビデの行動をここまで罰せられたことは、皆さんには、想像がつかないのではないのでしょうか。しかも神様が、ダビデに与えた罰も、なんと疫病でした。その手を神様がゆるめなければ、エルサレムの都市が壊滅しかねないものだったのです。

私は、今年、中国から世界中に広がった新型コロナウイルスの影響が身近に迫るにつれて、3千年前、神様がダビデに対して下した罰を思いださざるを得なかったのです。それが、感染症であったことから、身が震える思いがしたのです。この疫病が何であったのかは、考古学者や疫学者も、正確には特定できません。

問題なのは、ダビデが行ったのが「全数」調査だったことです(実際は、2つの部族は命令に従いませんでした)。ユダヤ・キリスト教的な世界観からは、民は全て神様のものです。ダビデは、「剣を使う者」を把握し、自ら権勢を握るために民を利用しようとしたことが問題だったのです。

私たちが経済学で用いる統計的な手法でも、母集団自体は決して知り得ないものであり、厳密な方法でサンプルをとり、「大数の法則」によって、全体を推定することしかできません。

ところが、近年の「ビッグデータ」の考え方は違うのです。それは、限りなく全数を把握しようとし、このデータを、人口知能(AI)に限りなく学習させようとし、その原動力に、「データが富を生む」という考え方があり、停滞する経済を活性化し、新たな価値を生み出せることです。私たちの日常が、インターネットへの依存を高めるなかで、個人の特徴や活動の履歴も、把握されていきます。

「第四次産業革命」という言葉は、新興国への技術流出におびえ、雇用が不安定になり、失業者や無業者を抱えて国内の経済格差も大きくなった先進国の苦悩が投影されています。

もちろん、ビッグデータは、使い方によっては、都市のインフラの維持や、自然災害の予知や被害の最小化、環境汚染の抑制、地球環境の保護にも役立つと考えられているのでしょ。また、行政だけでなく、住民もデータの提供者となることで、「スマートシティ」において、安全性と利便性や、高いレベルの公衆衛生や医療が実現できると考えられているのです。感染症の防止も、こうした技術によって、著しく進歩する可能性もあります。

同時に、ビッグデータのリスクは、データの流出事件があとをたたないこと、個人のプライバシーの侵害への警戒が高まるなかで、様々なセキュリティ強化を施しても、低下しません。IOTでつながれた企業ネットワークへのサーバーテロが恒常化し、個人の情報を盗み取るハッカーの被害が、世界中で、日々、身近で発生しているのです。

2045年に、人工知能の能力が「技術的特異点(シンギュラリティ)」を超えるという予測が、人々の意識を動揺させています。

コンピューターが人間の能力を超え、人間を支配するようになるというSF小説は過去にもいろいろありました。本当に深刻な問題は、AIが、いつのまにか、わたしたちの人生の意味や目標までインプットした機械になり、AIの下した判断に疑問をもたず、誰も責任をとらずに、人間社会が破局を迎えることです。

私たちが授かっている命は、日々創造的なものであって、機械的に決定されたり、プログラムされるものではないはずです。また、どんなデータも、決して一人ひとりを正確に把握することはできません。また、AIのなかに、知らず知らずのうちに、恣意的な目標を読み込ませ、民を支配することも許されません。

ダビデ自身が羊飼いでした。聖書は、神様を「良き羊飼い」として描いています。羊とは私たちの生命のことです。羊たちの生命と平安を阻害し、特定の利益のために「ビッグデータ」を利用する結果、生態系のバランスを破壊し、生命を破滅に導くことへ大きな危機感をもつべき時です。「パンデミック(感染症の世界的蔓延)」も、その兆候と理解し、力を合わせ苦難を乗り越えられるよう祈っています。